

## 花火のような 「希望」を

吉永英未（上海復旦大学）

2016年1月7日、不安を抱えてタイ・バンコクに旅立ち、東南アジアの力国を周り、そこで得た感動と他では体験し得ない経験、私にとって2016年の幕開けは一生に残る旅であった。

1ヶ月にわたる東南アジアの旅を終え、上海に戻り、孤独との戦い、そしていつしか夏が来て、鹿児島に一時帰国した。卒業前の最後の一時帰国である。お世話になっている親戚や先生方にお会いし、気合いを入れ直し、目標を確認し直した。

そのとき、鹿児島大学の木村朗先生から頂いた「喝」に、感謝しないわけにはいかない。復旦に何しに来たのか、私の最後の大切な任務、論文と向き合うことを、お叱りと「喝」を入れて教えてくださったのが、木村先生であった。

恩師の方々がっかりさせないために、そして自分自身のために、新学期が始まった6月から私は真剣に論文に取り組み始めた。初めて自分で論文構成を書き終えたとき、「私にもできるんだ」と湧き上がってきた自信と、そう思えた感動を今でも忘れられない。

図書室（サークルの活動室）に行く数は減り、なるべく多くの時間を論文に費やした。予定が無くて外に出なくても良い日は、前日に食堂で2食分をタッパーに詰めて冷蔵庫に入れ保存し、一歩も部屋から出ないでパソコンと本に向かい合った。

しかし、その一歩も外に出ない日は辛く、二日間も続くと精神的にきつかった。そのため、そんなときは自分を慰め、夜図書室に行って友達と時間を過ごした。大好きだったバドミントンからも一歩引き、自分に「引退」を言い聞かせた。

そんなとき、復旦大学日本人研究生会との出会いがあった。復旦にいたる大学院生の集まりであるが、前学期2人しか出会ったことがなかった日本人大学院生が、今学期になって初めて集まり、私たちはこの院生会を結成、月に一度自分の研究発表をすることになった。

その第一回目が私の論文の中間発表で、中国語で書いている内容を日本語で発表させていただいた。ドキドキしながら始まったが、中国語の文献を読み、書いているものを母語で説明することで自分の頭の中を整理することができた。

院生会のメンバーは10人ほどで、私だけが復旦の修士課程に正規で属し、他の先輩方は東北大、九大、一橋、立命館などから交換で来ている。専攻も出身もバラバラだが、論文の落としどころ、方向性と論文の価値など、重要な部分を話し合い、貴重なアドバイスをいただいたことは大きな収穫となった。

11月には、同じテーマで研究をされている上海交通大学の翟新先生にお会いし、交通大学で三時間にも及ぶ面談を行った。著書を読み、その後ろに書いている著者の紹介をもとに連絡をして、お会いしていただき、専門的なアドバイスと、私の論文に対する鋭い指摘をいただいた。

先生からの厳しいご指摘に、私は思わず後退してしまったと落ち込んだが、これまで支えてくれた友人や先輩方に励まされ、また立ち直した。足りないところを指摘されるということは、論文にまだまだ伸びしろがあり、成長の空間があるということで、プラスに受け取ることで、前に進むことができることに気づいた。

今年度最後の発表は、12月26日の日本人院生会で、私の論文の問題点と、これからどうやって修正を加え、形を整えていくのか具体的な方法について丁寧先輩方に指導していただいた。

そして27日は指導教員の馮先生に意見とアドバイスをいただいた。論文は自分の子供のようで、愛情を注げばそれだけ磨きがかかると言われるが、逃げていた前期から、向き合い始め、格闘し、そして様々な方に読んでいただきアドバイスをいただくことで、一層、また一層と磨きをかけることを覚えた。

その背後で支えてくれたのは、私の論文を根気強く読み、厳しい言葉をくれた友人たちであった。10万字の論文を3日間かけて読み、中国語を添削し、アドバイスくれたのは、文学部博士の李昌懋、哲学部修士2年の李凱旋、同じ歴史学部の顧明源先輩、そして部分部分で訂正してくれた数え切れない友人たちであった。彼らには感謝してもしきれない。

12月29日、日本にいる親友のまじに誘われ、論文のことを引きずっていたわたしも半分無理やり背中を押されて一緒に三泊四日の瀋陽、大連の旅に出ることになった。

「遠ければ遠いほうがいい」という彼女のリクエストのもと、もともとハルビンに行く予定だったが、学校の関係で1月2日には上海に戻る必要があったので、友人のいる瀋陽と大連二つの都市に行くことになった。

東南アジアの時のごとく、瀋陽で私たちは現地集合を果たした。私が上海から瀋陽に到着したのは午後三時半過ぎ。瀋陽出身の肖雄君が迎えに来てくれていた。

李昌懋の高校時代のクラスメイトで親友の彼とは、復旦の図書室であいさつを交わしたことがある程度だった彼の印象は、いつもニコニコ微笑んでいることだった。

そんな彼に瀋陽で合流し、市内に行って瀋陽の街並みを紹介してもらった。「満州国」の時代、日本は瀋陽を占領した。瀋陽、あとにいく大連、そして長春の広場は

つの都市同じ背景の広場がある。大連の「大和ホテル」が象徴しているように、これらは日本が占領していた時代に建てられたものである。

昼マイナス6度、夜マイナス14度という極寒の中、足をバタバタさせて夜の瀋陽の街を見学した。というのも、足を動かさないと指先が凍ってしまいそうだったからだ。彼の歴史の解説を聞きながらも、私はその冷凍庫にいるような寒さに、ここより北のハルビンに行かなくてよかったと心から思った。

写真撮影しようと思ったら、携帯は「凍死」、上海から持ってきたダウンも瀋陽の寒さにはかなわなかった。ガタガタ震えている私をみかねたのか、「僕は慣れているから寒くないから。」と肖雄は自分の着ていたコートを脱いで私に着せてくれた。

朝鮮人の方々も多く住む瀋陽で、韓国料理を食べて、今度は彼のお父さんの運転で夜二時に瀋陽に到着したまこを迎えに行った。

翌日、自分の気持ちにかかわらず、寒さでいやでも気合の入る瀋陽の朝、彼の案内のもとで私たちは瀋陽観光を始めた。まず最初に、お寺にいき、12月30日、母の三回忌のお参りをした。

そして、故宮、九一八記念館、キリスト教の教会など訪れた。理系の彼の歴史の解説は、行き届いており、心から感心した。

瀋陽の最後の夜、肖雄のお父さんとお母さんと一緒に食事をした。お父さんは中学、お母さんは小学校の先生という彼。彼の家の本棚にはたくさんの本が並んでいた。私はいま勉強中の囲碁の本をもらった。私とまこは瀋陽の夜をあとにし、翌朝また大連で彼と合流した。鈍行列車で瀋陽から大連まで来てくれた彼の親切に、ただただ感動した。

瀋陽、大連での食事、チケット代などすべて彼に負担させてしまった。レジの前で私と彼のお金の渡し合いが行われるが、結局彼にすべて払わせてしまった。

「これは中国の“伝統”のようなものだから。僕のところには友達が来てくれたら、絶対に僕がすべておもてなしするんだ。」と頑固としてお金を受け取ってくれない彼に、私たちは申し訳ない気持ち、そして感謝の気持ちでいっぱいになった。

大連での最後の夜、私は2012年大連に交換留学時代に出会った友人の家で大晦日の夜を過ごした。あれから9年の月日が経っていた。



当時29歳だった彼女はもう一歳児の母、私は当時の彼女の歳になっていた。思い出話に花を咲かせ、私たちは別れを惜しんで再会を誓った。

もうすぐ卒業するというと、多くの中国人の友人は、「中国人と結婚してここに残りなさい」と言う。その暖かさや心からありがたく思い、自分にもその問いかけをする。

私の最終的な目標は、日本で大学の先生になり、私が大学でなりたい自分を見つけ、輝く目標を見つけることができたように、一人でも多くの学生に、輝く道を見つけ、そのお手伝いをすることができたらと願っている。

そして、目の前にいる人たちの力になりたい。一生を、貧困を中心とする平和問題に取り組み、平和と向き合い、自分の力の限り平和を築いていきたいと思っている。それが私の、大雑把ではあるが、変わることはない、人生の目標である。

具体的な卒業後の道について、はっきりとした目標はまだ決まっていないが、まず目の前の修士論文を完成させ、復旦大学を卒業することが、現在の大きな目標である。もちろん、素敵な人と結婚し、幸せな家庭を築きたいとも心から願っている。

2017年が私にとって、飛躍の年であるならば、きっとこれからもずっとずっと熱い何かを追いかけ、夢を見ていられると思う。

叶えられないから夢になり、夢は目標としてずっと私の人生の道を照らしてくれる。いまは、悲観的に理想を語るのではなく、幸せに寄り添うように夢を語りたい。

人生は花火のようだと言っていた。花火のようにあっという間に消え去ってしまうのだ。

でも、花火の懸命に上がる姿と、必死に咲き誇り、そして儂くちっていく姿を、見ている人がいて、感動する人がいることを、心に留めておきたい。それが「希望」なのだと思ふ。

人生は花火のように儂い、でも希望は誰かの心の中に永遠に生き続けると。終わりは始まりを告げ、私たちはまた歩き出す。儂く散ってしまう人生に「希望」を残すために。



